

INFORMATION *Circular*

JAPANESE SOCIETY OF DEVELOPMENTAL BIOLOGISTS

■ごあいさつ……………会長 加藤淑裕……………	1
■第19回大会のご案内……………委員長 渡邊 浩……………	1
■第10回国際発生生物学会議を終って……………岡田節人……………	2
■第10回国際発生生物学会議に参加して……………阿形清和……………	3
■金谷記念号の編集を終えて……………平本幸男……………	4
■第13期日本学術会議……………平本幸男……………	5
■日本学術会議総会報告……………日本学術会議広報委員会……………	6
■団・国際交流研究員……………	10
■おしらせ……………	11
■「DGD金谷晴夫博士記念発行に際しての寄付」会計報告……………会計幹事 藤原昭子……………	12
■事務局より……………安増郁夫……………	13
■会員異動……………	14
■付・日本学術会議だより……………広報委員会……………	17

NO.52

DECEMBER 1985

日本発生生物学会

〒160 東京都新宿区西早稲田 1-6-1

早稲田大学教育学部生物学教室

日本発生生物学会の諸組織は以下のとおりです

会 長：〒 194 町田市南大谷11
三菱化成生命科学研究所 発生生物学研究室
加藤淑裕（電話 0427-26-1211 内線244）

DGD編集主幹：〒 812 福岡市東区箱崎6-10-1
九州大学理学部生物学教室
山名清隆（電話 092-641-1101 内線4408または4410）

DGD編集幹事：〒 730 広島市中区東千田町1-1-89
広島大学総合科学部
天野 実（電話 082-241-1221 内線357）

事 務 局：〒 160 東京都新宿区西早稲田 1-6-1
早稲田大学教育学部生物学教室
（電話 03-203-4141 内線 3911）

（幹 事 長） ^{ナスマス} 安増 ^{イクオ} 郁夫
（会計幹事） ^{フジワラ} 藤原 ^{アキユ} 昭子
（庶務幹事） ^{ナミキ} 並木 ^{ヒデオ} 秀男

学会センター：〒113 文京区弥生2-4-16
学会センタービル内日本学会事務センター
日本発生生物学会係（電話 03-817-5801）

入退会、会費納入、および出版物（DGD、サーキュラー等）の郵送については、上記学会事務センターに書面で御問合せ下さい。

ごあいさつ

一言御あいさつさせていただきます。

先づ、前回の学術学議の登録に当たり、私、会長と致しまして手続き上の遅延のため、当学会は学術会議の登録団体として認可されず、連絡団体として止まっておりました。これはひとえに私の責任であり、会員の皆様にも多大の御迷惑をおかけ致し、申しわけない事と存じて居りました。

極めて喜ばしい事に、安増幹事長以下の御骨折りにより、今回、学術会議より、正式の登録団体として認める旨、報告が御座居ました。ここに会員の皆様にお知らせすると共に、事務的な折衝に多大の労力を費して下さいました学会事務局の方々を始めと致しました関係各位に厚く御礼申しあげる次第です。

今年度の大きな懸案になっておりました、私達の学会誌、Development Growth and Differentiation の海外頒布の件に関しましては、今年度総会で会員諸兄姉の御賛同を得ました後、安増幹事長以下当該の委員の方々を中心に、学会センター並びにアカデミックプレスと折衝して参りました。このたび、正式の契約が成立することになり、来年度より、D. G. Dの海外での頒布は、A. P. が積極的に拡大してゆく方針です。私と致しましては、これを一のステップとして、益々D. G. Dの声価を海外に流布できればと考えて居る次第です。契約までの御足労に対して、関係各位に厚く御礼申しあげると共に、会員諸兄姉の益々のD. G. Dへの御支援をお願い申しあげます。

本年度は、岡田節人国際発生生物学会会長をリーダーとする第10回国際発生生物学会がロス・アンジェルスで8月の初めに開かれ、日本から多数の会員が参加され、その活躍は極だったものがあつたと存じます。日本発生生物学会といたしまして大変御同慶の至りと存じて居ります。

昭和60年11月

会長 加 藤 淑 裕

第19回大会の御案内

第19回の大会を、1986年5月15日(木)、16日(金)、17日(土)の3日間、筑波大学・大学会館(茨城県新治郡桜村)で行うことになりました。一般演題(口演およびポスター)とワークショップなどの企画を募集しています。詳細はすでにお送り致しました別紙大会案内をご覧ください。多数の会員の御参加をお待ちしております。

筑波大学生物科学系

第19回大会準備委員会

委員長 渡 邊 浩

第10回国際発生生物学会議を終って

第10回国際発生生物学会の会議をロス・アンジェルスで開催しました節は、非常に多くの日本からの参加を頂き学会の責任者として私から心からお礼を申し上げます。会議主催者の Dr. Slavkin も、かくも多数の日本人の参加のあったことを非常に喜んでおり、改めて日本の研究の広がり、この学会への大きな関心に感銘を受けておりました。私が、この学会の会長として勤める任期もあと9ヶ月を残すのみとなっておりますが、日本の方々がかくも本学会の行事に関心を寄せられ、かつ支持して頂いていることを現実に実感し大変嬉しく思っております。

この機会に私の日本の発生研究者に対する希望を二つ端的に記させていただきます。第一は、わが国の研究のレベルを質と量についての客観的な自己評価です。もし、国単位でいうならば、アメリカ合衆国を除けばわが国ほど多数の研究者のある国にはありません。このことは単に今回の会議がロス・アンジェルスという割合近接の地で開催されたので、参加者がアメリカ合衆国について多かったからというわけではありません。どの面からしても疑う余地のない客観的な事実であります。その質についてはどうでしょうか？ どの研究も、なんらかの意味でオリジナルであり、すべてが揃ってあるレベルに達したことを私たちはやっています。このことも客観的にみて事実であります。

しかし、残念なことながら真に突出したというべき研究の数は少ないのであります。つまり多くの研究者が国際的に関心を持ち、現在の状況に応じてその急速な展開を競っているようなテーマについて、わが国の研究者なしには進みに支障のあるような例が多くはみられないのは事実だといわざるを得ません。この点について、今後の努力を期待しましょう。若い世代の方の研究の推進は必須です。しかしながら、ボスの方々が自らの過去の栄光にとらわれることなく、自らと一心同体のものとして若い世代の方、新しいアプローチを促進することがより基本的だと思うのですが――。

第二は、今回の会議においてそのことが明らかにされていますように、いわゆる開発途上国の研究者の発生研究への関心が顕著に増大していることであります。わが国の研究のレベルを考えると、私たちのこうした方々への責任は重大だといわざるを得ません。特に、日本という国の地理的位置を考慮するとこのような世界的傾向に対して、私たちのもつ役割は大きいと思います。どうも私たちは外国とか国際とかいうと学びとる方向ばかりに、余りにも長くなされてきました。逆の方向の経験は殆んどないのです。これから私たちが目指さなければならない、真にオリジナルな突出した研究というようなものも、学ぶことと、学んでもらうことと両面のバランスのとれた活動があってこそ実現し得ると思うのですが――。ここ一、二年間に中国とインドとが、それぞれの国で初めてのことでありますが発生研究についての国際的な会合の開催をします。わが国の研究者が、ロス・アンジェルス会議と同じく、これらの会合に関心を寄せられるよう、現在の私の立場からお願い致します。

来年8月以後の4年間は、国際発生生物学会の会長は、フランスの Le Douarin 夫人が就任さ

れます。かくも高名な、顕著な研究業績をもった方が私の責務を引きついで頂けるのは、私にとって誠に光栄であり、かつこの学会の学問的レベルをよく象徴するものだと考えます。わが国からの同学会の委員のうち竹内郁夫先生（京大）は2期を満了されて退かれましたが、鈴木義昭先生（基生研）は引続き委員として再任され、私も前会長の資格で委員会に列なります。国際発生生物学会へのさらなる御支援を改めてお願いする次第であります。なお、1989年の第11回会議はオランダ、ユトレヒトでの開催がまっています。多くの日本人研究者の参加を切望しています。

岡 田 節 人（基礎生物学研究所）

第10回国際発生生物学会議に参加して

阿 形 清 和（基生研 形態形成）

4年前まだ私が大学院生であった頃、スイスのバーゼルで開催された第9回国際発生生物学会に参加した時は、実に衝撃的であった。もちろん、私にとっての初めての海外遠征であったこともあるが、Hognessがシ ュ ウジ ュ ウバエのBX-C領域の遺伝子クローニングを数百kbに渡って行っており、各突然変異がどのような遺伝子上の変異であるのか、そしてその遺伝子産物の働きは何なのかがすでに研究されていたことは新鮮な驚きであった。白髪の紳士 Hogness が淡々と語るその姿は実に印象的であった。そして、この Lewis Hogness らが切り開いた研究領域が、その後の発生生物学の発展に大きく寄与したことは今さら言うまでもないことであろう。

では、今度のロサンゼルスで開催された第10回大会の中で、今後の発生生物学の展開を占うような発表があったのだろうか。あったとすればどのような点なのか。これらの点について、私の独断と偏見に基づいて報告してみたい。

今後の発生生物学の展開に大きく寄与するであろう発表の筆頭は、なんとといっても M. Takeichi の発表であったと私は思う。仮に私が、M. Takeichi の仕事を知らずに今回のシンポジウムでの M. Takeichi の話を聞いたならば、Hogness の話を聞いた時のような新鮮な驚きを憶えたに違いないのである。細胞の接着分子の実体を明らかにし、各種接着分子の挙動をつぶさに観察することによって個体の体作りをダイナミックにとらえるこの研究領域は、M. Takeichi, G. Edelman の二大老舗に、新顔も続々と加わり、ますます発展していくことが充分期待できるのである。そして、各種接着分子の発現を人為的に操作する時代が訪れ、次回の国際発生生物学会のひとつのハイライトを飾ることと思われる。

次に掲げるのは、研究領域ではなく、研究手法として、今後の発生生物学の発展に寄与するであろうと思われるものが2つ程あったので、それらの手法を赤丸付きで御紹介したい。ひとつは、ギャップジャンクシ ュ ンの研究をしている Gilula の発表の中で用いられていた手法である。彼らは、ゼノパス初期胚の割球に抗ギャップジャンクシ ュ ン抗体を微量注入し、眼球及び一部の脳形成を行なわないおたまじゃくしを作成し、すでに Nature 誌に発表して話題をふりまっていたが、今大会の発表の中では、さらにアンチセンスRNAを用いて個体の発生の中でギャップジャンクシ ュ ンの発現を操作することに成功したことを報告した。シ ュ ウジ ュ ウバエにアンチセンス

RNAを注入し、突然変異体と同じ形質発現を行なわせることは、他のグループが Nature 誌で発表済みだが、脊椎動物の発生過程に用いて成功した話は、私の知る限りこれが初めての報告だと思う。もっとも、Gilvraらは牛のレンズギャップジャンクション遺伝子のアンチセンスRNA、それもたったの14merの合成ヌクレオチドをゼノパスの割球にうって、レンズだけ欠損したおたまじゃくしができたという報告をしたわけで、今ひとつその真偽のほどを疑う人もいる。が、とにかく、アンチセンスRNAを発生初期の個体に微量注入し、それに対応する遺伝子の発現だけをおさえる手法は、今後の発生生物学の研究に欠かせない技術になることは間違いないといえる。

もうひとつは、Gehringの発表の中でみられたもので、彼は発表の最初に奈良の大仏のスライドを映し、その後に台座にいる8本足の蝶を見せ、日本には古代から homeotic mutant の記載があったという余裕のある発表を行なったが、発表の最後に、緑の縞紋様に染まるショウジョウバエ胚を見せてしめくくった。これは、頭がftz遺伝子、胴体がβ-gal遺伝子というキメラ遺伝子をPエレメントで導入し、ftz遺伝子の発現が、stage・space 特異的であることを示したもののだが、その結果の表現の見事さに、改めてβ-gal遺伝子活用の威力が印象づけられた。このβ-gal遺伝子を用いる手法は、簡単かつ迅速で美しいという三拍子揃った手法であり、今後、発生生物学研究の分野で重宝されることは、これまた間違いないといえる。

今大会は参加者900人中約70人までを日本人が占め、日本の発生生物学者の海外進出を強く印象づけた大会だったといえる。しかし、残念ながら、メインシンポジウムでのスピーカーは竹市雅後氏一人という寂しさであった。今後、日本においても、発生生物学の発展に大きく貢献するような独創的研究が次から次へと伸びていくことが望まれる。

最後に、成茂寄付金によるISDB参加旅費援助に心から感謝し、私自身の発表においても大きな成果が得られたことを報告し終わりにしたいと思います。

金谷記念号の編集を終えて

平 本 幸 男

昨年2月13日に亡くなられた金谷晴夫博士を記念してDGDに記念号を出すことは昨年5月の編集委員会、運営委員会で決定されました。編集委員としては平本幸男、片桐千明、岸本健雄、毛利秀雄、長浜嘉孝、Thomas E. Schroeder、白井浩子、山名清隆の8名が選ばれ、委員長は私が務めることになりました。記念号には第27巻第3号をあて、金谷博士に研究分野の近い方々の論文約20篇をのせることにしました。編集委員が相談して、国内国外あわせて20名余りの方々に投稿の依頼をした結果、19篇の論文が掲載されて本年7月に刊行されました。この間、投稿の遅れなどによって発行が予定日より2ヶ月も遅れ、山名編集主幹をはじめDGDの編集発行にあたられる方々にたいへん御迷惑をかけ、また会員の方々に会誌がとどくのが遅れたことをおわび申し上げます。しかしそれ以外の点では大過なく記念号が完成したことで、私どもとしてはひと安心しています。記念号編集にあたっては委員の方々、特に投稿の依頼、督速、その他投稿者との連絡などにお骨折いただいた長浜嘉孝氏、外国人への投稿の依頼や英文の校閲などの点で多大

の甚力をいただいたThomas E. Schroeder 氏、追悼文をお書きいただいた毛利秀雄氏、DGD 編集主幹としてさまざまな点でお世話になった山名清隆氏に心からお礼申し上げます。

第13期日本学術会議

去る7月22日第13期日本学術会議が発足しました。日本学術会議は「わが国科学者の内外に対する代表機関として科学の向上発達を図り、行政、産業および国民生活に科学を反映浸透させること」（日本学術会議法第一章第二条）を目的として設立され、昭和24年1月、第1期が発足して以来36年余になります。その間、行政当局に対して研究所の設立などの科学政策に対する勧告や声明をおこなったり、文部省に対する科研費の審査員や特定研究の推薦や国際交流事業に努めるなどさまざまな活動をおこなってきました。

しかし近年になって学術会議のあり方について政府や科学者の間から種々の批判がうまれ、その改革がせまられていました。その結果、第13期からは学術会議会員の選出方法や研究連絡委員会の性格などについて改正がおこなわれました。会員の選出にあたっては従来の科学者によって直接選出する方法を改め、登録学術団体（学協会など）から選ばれた推薦人による推薦をもとにして総理大臣が任命する形式に改められました。研究連絡委員会は従来のものより大幅に数をふやすと同時に学協会との関係を密接にし、学協会を通して科学者の意志が学術会議の活動に反映するように改められました。

部制については従来通り1部（文学）、2部（法学）、3部（経済学）、4部（理学）、5部（工学）、6部（農学）、7部（医学）の7部制で、基礎生物科学関係の会員は主として第4部に属することも従来通りです。生物科学関係の第4部会員は第12期には3名でしたが、第13期からは動物科学、植物科学、生態・環境生物学、細胞生物学、遺伝学、分子生物学の各分野に1名ずつ定員があり、それぞれに平本幸男、今堀宏三、大島康行、寺山宏、飯野徹雄、渡辺格の6名が推薦、任命されました。6名の定員は第4部（定員31名）のうちでも物理科学、化学と同数であり、生物科学の重要性がこれらと並んで高く評価されたためと思います。

研究連絡委員会（研連）としては第12期には副会長世話担当としてIUBS研連があり、その下に動物学、植物学、遺伝学、微生物学、細胞生物学、生態環境生物学などの分科会がありましたが、第13期からは第4部世話担当として動物科学、植物科学の各研連が、副会長世話担当として細胞生物学、生態・環境生物学、遺伝学、分子生物学の各研連ができ、微生物学研連が第6部担当としてできることになりました。つまり、大部分の分科会が研連に昇格したのですが、これらの研連の間の連絡や共通の問題を話し合うための従来のIUBS研連にあたる組織が生態環境生物学研連の分科会という形になりました。このあたりの事情については前会員の椋山正雄先生が以前にインフォメーションサーキュラーや大会の総会を通して述べられた通りです。

発生生物学に関しては研連がありませんが、上記の生物科学関係の会員や研連の委員を通してその意志を学術会議の運動に反映していただきたいと思っています。現在のところ動物科学研連の委員には日本発生生物学会の会員が多数含まれています。参考のため今期の動物科学研連の委

員の名前を示します(敬称略)。

青木清, 上野俊一, 内田照章, 江上信雄, 岡田節人, 片桐千明, 越田豊, 小林英司, 佐藤英美, 相山正雄, 関口晃一, 高橋景一, 日高敏隆, 平本幸男, 丸山工作, 森田弘道, 吉田正夫。

学術会議は本年7月22~24日の総会, 部会にひきつづき, 10月22~25日にも総会および部会を開いて第13期の活動計画を決定し, これにそって活動を開始しました。活動計画の内容については学術会議の広報委員会がまとめた記事(本号掲載)をごらん下さい。

研連を含めての学術会議の最も重要な役割のひとつは科学者を代表してその意志を行政当局に伝え, それが学術体制, 研究費, 国際学術交流などさまざまな面の施策に反映してもらうことにあると思います。学術会議が発足した当初はその勧告や意見がかなりの程度まで行政に反映されていましたが, その後行政当局との間の相互信頼がうすれて勧告もとりあげられるものが少なくなり, いっぽう科学者側の学術会議ばなれがおきて今回の改革の原因にもなりました。新しい制度で出発した学術会議としては, 行政当局と科学者の両方に対して失なわれた信頼関係を回復し, 本来の役割を有効にはたすことが重要であると考え, 今後この点について着実に努力してゆくつもりです。新しい制度では会員や研連と個々の科学者との関係は学協会を通して従来よりも密接になるよう定められています。日本発生物学会会員の皆様はこのような点を理解されて日本学術会議をもち立てていただきたいと望んでおります。

平 本 幸 男 (第13期日本学術会議会員)

新しい袋に新しい酒を

——日本学術会議第98回総会(臨時)報告——

日本学術会議広報委員会

第13期会員は, 登録学術研究団体を基礎とする推薦制度に基づく最初の学術会議会員である。この新しい第13期会員による初めての総会—第98回総会—が, 7月22, 23, 24の3日間, 本会議講堂で開かれた。

○ 三役選出

22日(月), 午前中の新会員任命式に続いて, 13:00から三役, すなわち会長及び両副会長の選出が行われた。(当選が決まるためには過半数の票が必要で, 自由投票3回で決まらない場合には, 3回目の上位2人を候補者として決戦投票を行う内規になっている。)まず会長選挙が行われ, 第1回目は近藤次郎第5部会員を始め20名近くが選ばれ, 2回目, 3回目とも過半数をとる者がなく, 近藤会員と八十島義之助第5部会員の決戦投票となった。有効投票数196票のうち近藤会員138票・八十島会員58票という開票結果で, 近藤次郎会員が第13期日本学術会議会長に選ばれた。続いて人文科学部門の副会長の選挙に移り, 2回目の選挙で中川秀恭第1部会員が選ばれた。自然科学部門の副会長としては, 3回目の選挙で八木国夫第7部会員が選ばれた。新三役による就任挨拶があって, 第1日目の総会は終わった。終了後ただちに各部会が行われ, 各部の部長, 副部長, 幹事が選ばれた。別表に第13期役員の名・所属部・関連研連を示す。

○ 第12期活動報告など

23日(火) 10:00, 2日目の総会が始まった。初めに塚田裕三第12期会長から第12期における活動報告がなされ、若干の質疑を経て承認された。近藤会長から第12期会員の活動に対して感謝の意が表され、盛大な拍手が塚田前会長に送られた。続いて、今期の会員推薦管理会から小谷正雄委員長の代理として推管室長が推薦を決定するまでの経過報告を行った。提案審議に入り、「第13期活動計画委員会の設置及び各種委員会の当面の措置について」を各部に審議付託し、明日の総会で審議する旨、近藤会長から発言があった。

○ 第13期活動計画委員会の設置及び各種委員会の当面の措置について

24日(水) 10:00, 定刻どおり3日目の総会が始まった。まず、第13期活動方針の立案を目的とする臨時の委員会として活動計画委員会を次の総会までの間設置するという議題が、各部での前日における検討を経て、近藤会長により原案が提示され審議された。委員会の構成、開催回数、運営の仕方等についての質疑が活発に行われた後、第3部会員からの修正提案、すなわち原案における名称及び目的のところを「第13期の活動に関する基本的計画を立案するため、日本学術会議法第15条の2に基づく臨時の委員会として、“第13期活動計画委員会”を第99回総会までの間、設置する。」というように修正する案がまず可決された。また、代理あるいはオブザーバーも委員会出席が可能になるように明記すべきであるという意見もあったが、委員会の運用に当たってその趣旨が生かされれば、特に修正提案はしない旨の発言があり、了承された。その後、それぞれの常置委員会の業務等で緊急を要するものは暫定的に会長と副会長が処理すること、国際協力事業特別委員会に限り暫定的に従来どおりの構成に基づいて設置することを含めて、議題全体の採決に入り、圧倒的多数で可決され、第3日目の総会は終了した。こうして第13期の活動は始まった。会員の出席率は第1日目94.8%、第2日目95.2%、第3日目95.2%であった。

○ 総会の横顔—総理大臣による任命式など

第98回総会に先立ち、第13期日本学術会議会員の任命式が7月22日(月) 11:10から総理大臣官邸ホールで行われた。新会員予定者は一旦総理府の講堂に集合し、それから5台のバスに分乗して官邸に到着した。辞令交付は各部別に行われ、まず第1部の氏名が順次読み上げられ、部を代表して中川秀恭会員が中曽根康弘内閣総理大臣から辞令を受領した。以下2~7部の会員に対しても同様に辞令交付が行われた。2~7部の代表者は次の方々であった。2部—小山昇、3部—山城章、4部—渡邊格、5部—松本正、6部—三村耕、7部—亀谷哲治。その後、総理大臣から第13期会員に対する期待をこめた挨拶と、最年長の中川第1部会員が会員を代表して国民の期待に応えたい旨の挨拶があり、11:38任命式は終了した。なお、出席会員は196名であった。

23日には、午後の各部会終了後18:00から、藤波内閣官房長官主催による歓迎パーティーが総理府の講堂で行われた。松永文部大臣、伏見・久保元学術会議会長、和達元学士院長、小谷推薦管理会委員長等も、新会員とともに招待され、出席された。藤波官房長官の挨拶で始まり、学士

院からは有沢学士院長の代理として木村先生による祝辞，近藤会長によるユーモアたっぷりの答礼の挨拶と続き，増田学術振興会会長の乾杯の音頭で招宴が開始された。各所で活発に歓談が行われ，友好的雰囲気の中で盛大なパーティーを閉じた。

会 長	人文科学部門 副 会 長	自然科学部門 副 会 長
近 藤 次 郎 (5部・経営工学)	中 川 秀 恭 (1部・宗教学)	八 木 國 夫 (7部・生化学)

	部 長	副 部 長	幹 事	幹 事
1部	本 明 寛 (心理学)	平 山 輝 男 (語学・文学)	黒 田 俊 雄 (歴史学)	寺 沢 恒 信 (哲学)
2部	片 岡 昇 (社会学)	小 林 孝 輔 (公法)	谷 川 榮 彦 (政治学)	室 井 法 力 (公法)
3部	高 宮 晋 (経営学)	置 塩 信 雄 (経済学)	染 谷 恭 次 (会計学)	藤 井 隆 政 (経済学)
4部	田 丸 謙 二 (化学)	渡 邊 格 (分子生物学)	有 馬 朗 人 (物理学)	大 木 道 則 (科学教育)
5部	伊 藤 富 雄 (災害工学)	米 田 幸 夫 (材料工学)	猪 瀬 博 (情報工学)	山 口 梅 太 郎 (資源開発工学)
6部	三 村 耕 (農業総合科学)	江 川 友 治 (土壌肥料学)	飯 田 格 (植物防疫)	日 比 谷 京 (水産学)
7部	本 間 三 郎 (生理科)	北 川 晴 雄 (医学)	鎮 目 和 夫 (内分秘学)	高 久 史 磨 (血液学)

人類の永続的繁栄のために創意を

——日本学術会議第99回総会報告——

日本学術会議広報委員会

日本学術会議第99回総会（第13期・第2回）は，10月23～25日の3日間開かれ，今期の活動計画並びに6常置委員会・8特別委員会の設置を決定した。

第1日，午前。まず会長より，第13期活動計画委員会などの諸委員会が設置されたこと，科学技術会議・日本学術振興会などに関する諸事項，及び本会議が主催した国際的学術会議に関することなどが報告され，続いて広報委員会・財務委員会などに関する諸事項がそれぞれの担当者から報告された。

活動計画案・委員会設置案の提案

諸報告の後，引き続き近藤会長が「第13期活動計画（案）」並びに委員会の設置に関する3つの提案について提案説明を行った。第13期活動計画は，全学問的視野に立つこと，研連活動を強化すること，国際協力を拡大すること，創造性豊かな研究を発展させること，という4つの視点に立って立案されており，今期の活動の重点目標として（1）人類の福祉・平和及び自然との係わりにおける科学の振興，（2）創造性豊かな基礎的研究の推進と諸科学の整合的発展，（3）学術研究の国際性の重視と国際的視野の確立，の3つを掲げている。またさらに今期中に報告・提言などの

形で何らかの成果を得べき課題として、それぞれの重点目標の下に合計18のサブテーマを設定している。常置並びに特別委員会は、この活動計画に基づいて会員が活動する主要な場であるが、過去の数期にわたってほとんど不変であった常置委員会に関してもかなり大きな改変を加えていることが今回の提案の特色である。

第1日、午後。各部の部会が開かれ、午前中に提案された議案の審議が行われた。提案された議案の内容は、活動計画委員会が二か月以上かかって審議を重ねて作成したものであり、またその間に2回の連合部会及び部会を開いて各部の意見を聴き、その上で調整したものである。したがって、この日の部会では慎重に最終的審議が行われた。

活動計画案・委員会設置案の採決・決定

第2日、午前。前日提案説明の行われた四つの提案につき、一部の字句修正が行われた後、採決を行い、いずれもほとんど満場一致に近い圧倒的多数の賛成で可決された。常置委員会の組織変えに関する第3の提案は、会則の一部改正であるから、3分の2以上の賛成者を必要とするものであるが、挙手による採決でも疑問の余地のない賛成多数で可決された。このような結果になったのは、活動計画委員会及び部会の審議が積み重ねられ、その間に原案が何度も書き改められて会員のほとんど全員が承認できる内容にまで仕上げられたものが総会に提案されたからであると考えられる。なお、この決定によって設置されることになった委員会は次のとおりである。

常置委員会

第1 常置委員会—研究連絡委員会活動活性化の方策及び日本学術会議の組織等に関すること。

第2 常置委員会—学問・思想の自由並びに科学者の倫理と社会的責任及び地位の向上に関すること。

第3 常置委員会—学術の動向の現状分析及び学術の発展の長期的動向に関すること。

第4 常置委員会—創造的研究醸成のための学術体制に関すること及び学術関係諸機関との連携に関すること。

第5 常置委員会—学術情報・資料に関すること。

第6 常置委員会—国際学術交流・協力に関すること。

特別委員会

医療技術と人間の生命特別委員会

生命科学と生命工学特別委員会

高齢化社会特別委員会

生物資源・食糧と環境特別委員会

資源・エネルギーと文化・経済・環境特別委員会

高度情報社会特別委員会

国際的学術研究機構特別委員会

国際協力事業特別委員会

「総会中の自由討議」行わる

第2日、午後。「老化に関する研究動向と高齢化社会問題」をテーマとして、まず八木国夫第7部会員（生化学）の「老化に関する研究動向」と那須宗一第1部会員（社会学）の「人口の老化の研究動向と高齢化社会の研究課題」という二つの講演が行われ、引き続きティスカッサントとして、一番ヶ瀬康子第1部会員が社会福祉の立場から、大川政三第3部会員が財政学の立場から、原沢道美第7部会員が老人医学の立場から、それぞれの見解を述べた。

第3日。午前に常置委員会、午後に特別委員会が開かれ、それぞれ委員長・幹事を選出し、今後の審議予定について協議した。

こうして第13期日本学術会議は、その実質的活動の緒についたのである。総会の出席率は、第1日88.6%、第2日89.5%、第3日83.3%であった。

(広報委員会)

昭和61年度生物科学・団・国際交流研究員

先般インフォメーションサーキュラーでご依頼しました生物科学・団・国際交流研究員候補者の推薦は9月30日で締め切らせていただき、応募された候補者の資料にもとづき、10月23日に團基金実行委員会で選考作業を行いました。その結果、お茶の水女子大学理学部生物学教室の豊島陽子氏を昭和61年度の国際交流共同研究員に決定いたしましたのでお知らせいたします。同氏はStanford大学のDr. Spudichの研究室でミオシンをコートしたプラスチックビーズとアクチンの相互作用の解析やその方法論をダイニン微小管に適用した運動系の解析を予定されています。

なお、アメリカからの交流研究員候補者についてはアメリカ委員会で11月中に内定される予定です。

團基金による国際交流共同研究は皆様方のご支援によってすでにアメリカから2名(M. pratt M. porter)日本から5名(田中裕一郎、浜口幸久、増田道隆、丸山好彦、沢田知夫)を数えます。今後更に若手研究者の交流を盛んにするために皆様方の一層の御支援をお願い致します。

團基金国際交流実行委員会

選考委員会 岡崎嘉代
加藤淑裕
酒井彦一
團勝磨
能村堆子
平本幸男
毛利秀雄
安増郁夫

「器官形成研究会」発足のお知らせ

八 杉 貞 雄 (東大・理・動物)

上記研究会が、下の趣旨によって発足しました。入会御希望の方や関心のおありの方は、事務局へ御問い合わせ下さい。

一 趣 意 書 一

近年の細胞生物学の進歩には、目覚ましいものがあります。細胞を生体外に取り出して、その性質を調べることは、ハリソン及びカレルに源を発しますが、細胞運動、組織間相互作用、形態形成などの生物学の諸現象が、細胞の持つ固有の性質で説明されようとしています。

また、最近の生化学、分子生物学、細胞生物学の成果は、Life Scienceあるいは、Biotechnology といった呼び名で社会的にも関心を集め、これらの成果を社会生活のなかに積極的に還元していこうとする時代になってきました。これは、医学、歯学、薬学、工学、理学、農学などの関連各領域の研究者における共通した認識であると考えられます。

さて、高等生物をみる時、生命の諸現象の発現の場は、細胞の集団の場としての組織あるいは器官であり、これは生体の機能的および構造的の基本単位であるといえます。この基本単位を構築するために、生物は、細胞分化、細胞運動、細胞認識といった細胞固有の性質に立脚した形態形成・器官形成と呼ばれるからくりを持っています。このからくりを解き明かす事は、現代生物学に課せられた主要な課題の1つでもあります。この基本過程の解明は、社会生活への影響もまた大きいと考えられます。性能の良い細胞組み込み型人工臓器の開発への道を開き、医療のみならず、Biotechnology 関連領域への貢献も大きいと考えられますし、また物質代謝研究領域への新しい実験系の導入にもつながります。

このような認識のもとに、器官形成に関心を持ちつつ、現在、諸学会で活躍している研究者が集まり、それぞれの固有の立場から研究の成果を発表し、情報交換および親睦を深めるための研究会を持つことになりました。器官形成学の確立と発展に、基礎、応用研究を問わず、また従来の専門分野の枠にとらわれず、関心を持つ研究者の参加をお願いしたいと思います。器官形成に関係の深い細胞生物学、発生生物学、医学、歯学、農学、さらに器官構築に関係する天然高分子領域および合成高分子領域の研究者の活発な交流の場として発展させていきたいと考え、皆様のご賛同をお願い致します。

1985年 6月22日

顧 問

藤田学園保健衛生大学医学部

東京女子医科大学

北里大学医学部

東京医科歯科大学難治疾患研究所

岡 達

桜井 靖久

塩谷 信幸

永井 裕

東京大学理学部	水野丈夫
発起人	
東京農工大学工学部	赤池敏宏 *
名古屋大学医学部	岩田久
東京医科歯科大学歯学部	江藤一洋
名古屋大学医学部	上田実 *
東京女子医科大学	大河原久子
東京医科歯科大学歯学部	久保木芳徳 *
群馬大学内分泌研究所	近藤洋一
北里大学医学部	佐々木憲一
岡山大学温泉研究所	野一色康晴
東京医科歯科大学難治疾患研究所	畑隆一郎 *
日本医用高分子材料研究所	宮田暉夫
東京大学理学部	八杉貞雄 *
三菱化成生命科学研究所	山形達也
北里大学医学部	吉里勝利 *

(*:世話人)

事務局 〒466 名古屋市昭和区鶴舞町65
 名古屋大学医学部口腔外科学教室内
 器官形成研究会事務局
 電話 052-741-2111 内線2293

「第二回初代培養肝細胞研究会」のお知らせ

日時 昭和61年6月5～6日

場所 徳島県郷土文化会館(徳島市)

出席、発表の詳細は下記に郵便にてお問い合わせ下さい。

初代培養肝細胞研究会

事務局

〒770 徳島市蔵本町3丁目18番地の15

徳島大学医学部酵素研究施設 酵素病理部門

「DGD金谷晴夫博士記念発行に際しての寄付」会計報告

先般、DGD27巻3号を Dr Kanatani

Memorial Issue: The Initiation of Development

として発刊致しましたが、下記の多くの有志の方々から御寄付を戴きました。厚く御礼申し上げます。

○御寄付戴いた方々（敬称略，五十音順）

<学会員>

阿久津四良，浅島 誠，安部真一，天野 実，雨宮昭南，荒木正介，伊井一夫，池上 晋，井坂三郎，石田幸子，石田寿老，石原勝敏，浦 良治，遠藤克彦，遠藤浩良，大石茂子，大西英爾，岡田節人，尾里健二郎，小沢鉄二郎，押尾 茂，大日方 昂，片桐千明，加藤淑裕，河合 武，菅野義信，岸本健雄，木下清一郎，久佐 守，楠慎一郎，工藤重治，久保田 宏，河野剛志，古賀克己，越田 豊，小嶋 学，児玉隆治，五島喜与太，佐藤矩行，佐野 清，志田寿人，嶋田 拓，東海林隆次郎，白井浩子，梶山正雄，鈴木 博，関口豊三，石 龍徳，高崎裕子，高橋延昭，高橋裕哉，高橋三保子，竹内重夫，竹内拓司，田原 胖，団 勝磨，団まりな，利根川泰遠，中内光昭，中沢 透，中辻憲夫，並木秀男，能村哲郎，野川宏幸，灰野 和，橋本有弘，長谷川通雄，浜口みやこ，原 幸喜，日高敏隆，平本幸男，樋渡宏一，藤沢弘介，富士野行男，藤原昭子，星 元紀，細川和子，堀田凱樹，三木堆子，水野丈夫，水野三木朗，三田雅敏，毛利秀雄，森岡清和，森脇和郎，矢崎育子，八杉貞雄，安田峯生，安増郁夫，柳沢富雄，山縣敦子，山形達也，山上健次郎，山崎君江，山名清隆，山本謙也，吉里勝利，米田満樹，若松佑子，渡辺一雄，長浜嘉孝

(101件)

<会員外の方>

田口茂敏，菊山 栄，後藤昌之（培風館）

吉富製薬株式会社中央研究所

(4件)

以上 103件 総 額 1,185,000円

実収入 1,178,970円

<内 訳>

収 入 振 込 1,120,000円

現 金 65,000円

支 出 郵便手数料 6,030円

実収入 1,178,970円 以上

昭和60年12月27日現在

会計幹事 藤 原 昭 子

事務局より

事務局長 安 増 郁 夫

前事務局時代から会長及び編集幹事の皆様が鋭意進めておりましたアカデミックプレスからのDGDの海外頒布が1986年1号から実現することになりました。そのための，本学会と学会事務センター，学会事務センターとアカデミックプレスとの契約がそれぞれ7月26日と10月1日に完了しました。いくつかの問題点があり多少遅れましたし，これから談合しなければならない問題点（DGDのサプリメントの取り扱いなど）がありますが，一応の解決を致しましたことを御報せいたします。又，学術会議の登録に関しましても，10月28日にかかなり多くの書類を運び込み，や

つと11月11日に登録団体になりました。事務能力のない幹事長ですが幹事諸氏の協力で学会の懸案のいくつかを解決出来たことを喜んでおります。

会 員 異 動 (昭和60年6月~10月)

＜新入会＞	所 属	(①テーマ ②材料)
石丸 治郎	愛媛県農業試験場	①新作物のバイオテクノロジーによる育種 ②植物
中村 峯子	埼玉県立熊谷商業高校	①両生類・タニシ卵の初期発生 ②イモリ, アフリカツメガエル, タニシ
長谷川 頭太郎	都立成瀬高校	①両生類胚の細胞分化, 特にイオンによる影響 ② <i>Rana japonica</i> , <i>Xenopus laevis</i>
Mona A. E. Rageh	群大内分泌研 比較内分泌部門	①再生とホルモン ②イモリ, 無尾目幼生
Essam E. D. A. Moussad	同上	①再生と神経 ②イモリ, 無尾目幼生
中村 雅生	熊大・医・三解	①羊膜類に於ける形態形成 ②マウス, チック
絹谷 政江	愛媛大・医・一解	①内分泌腺の形態形成・分化Spinal cord キメラ ②ラット, ウズラ
浜崎 辰夫	上智大・生命科学研	①硬骨魚の卵形成・胚の孵化機構 ②ヒメダカ <i>Oryzias latipes</i>
小松 靖彦	東大・薬・薬品製造工学	①発生現象における振動現象の役割について ②キイロタマオコリカビ

Dictyostelium discoideum

＜住所変更＞ 新住所

杉浦 靖夫	(自)〒343 越谷市千間台3-2 せんげん台パークタウン2-2-803
富士野 行男	帝京大・医・薬理
山 舗 直子	酪農学園大・生物
川 村 健 弥	酪農学園大・生物
角 川 裕 造	明治乳業ヘルスサイエンス研究所
北 嶋 隆	(自)〒197 福生市熊川478
大 石 昇	帝京大・医・基礎R 1室
二 木 馨	早稲田大・教育・生物

野 呂 知 加 子 国立武蔵療養所神経センター
天 野 寿 一 東工大・理・生物
漆 原 秀 子 筑波大・生物科学系
藤 井 孝 朗 萬有製薬開発研究所
梯 正 之 広大・総合情報処理センター
中 島 晴 子 (自)〒460 名古屋市中区栄1-13-20-203

<退 会>

三 角 優 子, 小 山 正 和

<訂 正>

51号 P.10上から 3行目

誤

正

佐 野 清 (北里大・助教授) → 講 師

〔賛助会員〕

組織培養はパイレックスコーニングの岩城硝子㈱ (〒100 千代田区丸の内3-2-3)

TEL 03-214-7401

生物学・生態学洋書のことならグリーン洋書㈱ (〒211 川崎市幸区小倉610-1-506)

TEL 044-533-0470

日製産業株式会社

(〒453 名古屋市中村区名駅4-6-18 名古屋ビル内)

発生学をはじめとする生物科学書の出版社・培風館 (〒102 千代田区九段南4-3-12)

最良の選択ファルコン組織培養器具ベクトン・ディッキンソン・オーバーシーズ Inc.

(〒107 港区赤坂8-5-84 島藤ビル) TEL 03-403-9991

マウス・モノクローナル抗体(アロ抗体)は明治乳業㈱ (〒104 中央区京橋2-3-6)

TEL 03-271-4333

三菱化成生命科学研究所

(〒194 町田市南大谷11)

科学の技術に奉仕する理工学社

(〒113 文京区本駒込5-9-10)

TEL 03-928-5211

次代を担うバイオテクノロジー和研薬株式会社

(〒606 京都市左京区北白川西伊織町25)

タイプ別コラーゲン抗体は㈱アドバンスへ

(〒103 中央区日本橋小舟町5-7)

TEL 03-667-1551

第13期活動計画決まる

昭和60年10月 広報委員会

日本学術会議法の改正によって、従来の科学者による直接選挙によるものから、学術研究団体（学協会）を基礎とする「推薦制」となった新しい会員選出制度の下に選ばれた「第13期日本学術会議」は、去る7月22日発足しました。そして、このたび開かれた第99回総会（10月23日～25日）において、第13期における活動の基本的立場と具体的な課題を明らかにした「第13期活動計画」を決定するとともに、実際の活動の舞台となる常置・特別委員会の設置を決定しました。その概要は、次のとおりです。

第13期日本学術会議は、「第13期活動計画」に盛り込まれた課題の具体化に当たっては、今後とも学協会と密接な連携を保ち、逐次お知らせしていく考えていますので、広く多くの科学者の御理解を賜るようお願いいたします。

活動計画

戦後40年、我が国における科学・技術は目覚ましい発展をとげ、経済の高度成長とともに、国民生活の向上に多大の貢献をしてきた。しかしながら、近年経済・社会環境の激しい変化を背景に、様々な問題が科学・技術のあり方のうえに生じている。その中には、科学と人間との係わり方の根源を問直すようなものも含まれている。また、国際社会における我が国の地位の向上も加わって、科学の面における我が国の貢献への期待は国際的に強まっている。

日本学術会議は、創設以来、学術研究団体や科学者との連携のもとに、その目的・職務の遂行に努力し、我が国の学術研究体制の整備についての重要な勧告等を行い、研究所の設立などを含めて数々の業績をあげてきた。また、国際協力事業への参加をはじめとして世界の学界と提携しつつ、科学の進展に貢献してきた。しかしながら、創設後36年余を経た現在、科学を取り巻く情勢は、国際的にも国内的にも著しい状況の変化を生じた。学術研究団体を基礎とする新しい会員選出制度のもとに発足した第13期日本学術会議は、本会議の創設以来の基本的精神を堅持しながら、改むべきは改め、一層の成果をあげるべく努力するものである。

日本学術会議は、総合的な科学政策に関する重要事項を自主的に調査・審議し、その実現をはかる機関としての使命と役割を確認したうえで、会員の科学的知見を結集し、時代の要請に即応しつつ将来を見通した基本的理念を確立し、我が国における学術研究の一層の推進をはかるために、本会議の本来の目的を、次の視点から実現することが必要であると認識した。

人文・社会および自然科学を網羅した日本学術会議は、全学問的視野に立ち、学術研究団体を基盤とする科学者の代表機関であることを認識して、全科学者の参加と意見の集約を真摯にはからなければならない。さらに、本会議が集約した科学者の意見が政策に反映するよう、他の学術関係諸機関と協議のうえ、その役割分担を明確にしつつ、これらとの連携の強化をはかる必要がある。

また、学術研究団体を基盤とする日本学術会議は、このたび法制化された研究連絡委員会の重要性を認識しその活動を強化するとともに、学術研究団体の活動を助長し、研究基盤の強化をはかり、高度化する科学の発展に貢献する必要がある。

我が国の科学者を内外に代表する機関である日本学術会議は、国際社会における我が国の地位の向上と海外諸国の期待に応えて、学術の分野における国際協力を飛躍的に拡大する必要がある。

日本学術会議は、真理を探求するという理念に立脚し、科学の将来への展望をひらいていくため、科学の開かれたあり方と国際性を重視し、学問・思想の自由の尊重と研究の創意への十分な配慮のもとに、長期的かつ大所・高所の視点に立

ち、創造性豊かな研究を進展させることが必要である。

日本学術会議は、以上の諸点を踏まえ、科学者の総意を代表して科学の精神を高揚し、21世紀に向けて望ましい科学のあり方を検討して、総合的な科学政策に指針を与えることにより、国民の期待に応えるとともに人類の福祉と平和に貢献することを期するものである。

1 重点目標

第13期活動計画の重点目標は、次のとおりとする。

(1) 人類の福祉・平和および自然との係わりにおける科学の振興

科学・技術の著しい発展は、人間生活を豊かにすると同時に、現代社会の高度の複雑化とあいまって、人間社会に新たな緊張をもたらし、人類の福祉・平和および自然環境を脅かすのではないかと懸念を招いている。人類の福祉・平和および自然との係わりを十分に考慮しつつ、科学の総合的振興をはかることは、21世紀へ向けての極めて重要な課題である。これは、人文・社会および自然科学を網羅した本会議の特長を十分に発揮してこそ可能となるものである。科学の振興・発展の人間・社会への望ましい貢献および自然界への好ましくない影響の防止への具体的構想を樹立し、あわせてこれに対応する社会の体制整備に明確な指針を提示する。

なおまた、今日の社会的現実が提起している複雑な問題を解決するには、既成の個別的学問領域のみでは十分に対応し得ない。多くの学問領域が、その独自性を保ちつつ、共同の努力を行い、学問の内容・体系の変革にまで進むことによって、総合的な研究のあり方を追求することが必要である。人間性の尊重を基礎とした科学の発展のための条件整備、学際・複合領域および総合的学問研究の的確な方向づけ等を明らかにすることは必須条件である。

(2) 創造性豊かな基礎的研究の推進と諸科学の整合的発展

科学・技術の発展には、基礎的研究の推進が不可欠であることは言をまたない。我が国の科学の国際的地位の確立をめざし、その発展に向けた長期展望・指針・将来計画の策定についての基盤となる創造的な基礎的研究の推進に積極的に取り組む必要がある。

また、学術の領域は広範多岐であり、それぞれの領域ごとに方法論も異なり研究者の求めるものに大きな違いがあることに思いをいたし、それぞれの研究者の声を聞き、それぞれに適した育成策を講ずることにより諸科学の整合的発展をはかる必要がある。

まず、創造性の基礎となる個人の着想を重視し、革新的研究の強化等を積極的にはかる。一方においては、学術研究体制や社会・産業構造等に内在する創造性をばむ負の要因の解消に向けて建設的提言を行うなど基礎的研究推進のための条件整備のあり方について、根本的検討を加える。

とりわけ、他の先進諸国に比較して我が国の学術情報・

資料の整備は著しく不備である。創造的な学術を振興するための基盤整備の一環として、絶えず我が国の学術情報・資料の全般にわたる状況を把握し、その蓄積・処理・利用の方策を審議、提言していくことが必要である。

(3) 学術研究の国際性の重視と国際的視野の確立

我が国の学術研究の国際交流・協力のあり方について、これまで本会議が築いてきた実績の評価を踏まえつつ根本的検討を加える。さらに、相互理解と互惠を基礎とした発展途上国に対する共同研究の推進、技術協力・技術移転・共同開発のあり方等を検討する。このようにして、先進国・発展途上国双方との国際交流・協力の基本姿勢およびその抜本的充実方策を明らかにする。

また、科学・技術の急速な発達に伴って重大な影響を受けつつある国際的な政治・経済・社会関係を諸科学の学際的研究によって分析し、そこで生じた諸問題についての解決の方策を究明する。

そのためには、学術研究の国際性を重視して、その国際交流の諸条件を整備し、全世界の科学者と協力して科学の望ましい発展に貢献するための努力を払っていくことが必要である。

課題

上述の重点目標ののっとり、現下の最重要課題に対応し、第13期中に、報告・提言等の形で成果を得べき課題を選定する。

これらの課題については、研究連絡委員会の協力を求め多数の学術研究団体と密接な連携を保ちつつ、広く英知を結集して総合的に審議し、適切な報告・提言等を行うものである。

なお、これらの課題の審議に当っては、必要に応じ中間報告又はその他の形で随時報告を行うものとする。

(1) 人類の福祉・平和および自然との係わりにおける科学の振興

この課題の重要性については、既に述べたとおりであるが、本課題については直接に関係する学問だけでなく広く諸科学が積極的に関与すべきであることを十分に考慮し、その方法と課題を検討する。当面、次のサブテーマ等についての問題点および今後の展望をはかろうとするものである。

<サブテーマ>

- ① 人類の福祉・平和および科学
- ② 科学者の倫理と社会的責任
- ③ 医療技術と人間の生命
- ④ 生命科学と生命工学
- ⑤ 高齢化社会
- ⑥ 生物資源・食糧と環境
- ⑦ 資源・エネルギーと文化・経済・環境
- ⑧ 高度情報社会
- ⑨ 平和研究機構

(2) 創造性豊かな基礎的研究の推進と諸科学の整合的発展

本課題は、日本学術会議が恒常的に取り組むべき課題であるので科学者の創造性を最大限に発揮するため、研究の自由を保障し、科学者の地位を高めるための努力をするとともに、創造性に富んだ研究者の養成、研究基盤の強化と研究の活性化、我が国の研究費のあり方、創造的研究醸成のために必要な条件整備の課題等について問題点を明らかにし、積極的提言等を行うものである。

<サブテーマ>

- ① 研究者の養成
- ② 研究基盤の強化と研究の活性化
- ③ 学術動向の総合的分析と長期研究計画の検討
- ④ 研究費のあり方

(3) 学術研究の国際性の重視と国際的視野の確立

我が国の国際的地位の向上に伴い、学術研究の面におい

ても我が国に対する国際社会からの期待が増大してきている。世界の科学者と提携して人類の平和と福祉を促進するよう努力するとともに、特に発展途上国に対する学術的な協力の方策について検討を行うものである。

<サブテーマ>

- ① 学術研究の国際交流・協力のあり方
- ② 国際協力研究事業
- ③ 国際的な学術研究機構のあり方
- ④ 技術協力・技術移転・共同開発問題
- ⑤ 国際関係問題

3 第13期日本学術会議の具体的活動の重点

各委員会の審議を通じて、あるいは個別に日本学術会議の業務を円滑にするため、下記の具体的活動を重点的に行う。

- (1) 国際交流・協力事業の拡充を行う。
- (2) 研究連絡委員会の見直し、活動の活性化をはかる。
- (3) 重点目標について、諸科学の協力のもとに整合性のとれた審議の促進をはかり、その成果を講演会・シンポジウムの開催等により広く一般に公表する。
- (4) 重要にして緊急性のある勧告等を建設的に行う。
- (5) 広報活動の充実をはかるなど学術研究団体との連携強化に努める。

4 委員会

常置・臨時(特別)の委員会は、現会員の意見を反映させ前期の申し送り事項をも踏まえて次の基本方針に基づいて設置する。

(1) 常置委員会設置の基本方針

目的・任務に即して日本学術会議として恒常的に調査・審議を進めていく必要がある事項について、個々の委員会の職務を明確にしたうえで設置する。

(2) 特別委員会設置の基本方針

重点目標、課題に即して、長期的展望を踏まえて今任期中に調査・審議の結果、勧告・要望・諮問答申として取りまとめることが望ましい事項について設置する。

常置委員会

第1 常置委員会——研究連絡委員会活動活性化の方策及び日本学術会議の組織等に関すること。

第2 常置委員会——学問・思想の自由並びに科学者の倫理と社会的責任及び地位の向上に関すること。

第3 常置委員会——学術の動向の現状分析及び学術の発展の長期的動向に関すること。

第4 常置委員会——創造的研究醸成のための学術体制に関すること及び学術関係諸機関との連携に関すること。

第5 常置委員会——学術情報・資料に関すること。

第6 常置委員会——国際学術交流・協力に関すること。

特別委員会

医療技術と人間の生命 資源・エネルギーと文化・経済・環境

生命科学と生命工学 高度情報社会

高齢化社会 国際的学術研究機構

生物資源・食糧と環境 国際協力事業

多数の学協会の御協力により、「日本学術会議だより」を掲載していただくことができ、ありがとうございます。なお、御意見・お問い合わせ等がありましたら下記までお寄せください。

〒106 港区六本木7-22-34

日本学術会議広報委員会

(日本学術会議事務局庶務課)

電話 03(403)6291

三菱化成

なか しべ っ
中標津血清

ライフインダストリーの三菱化成が採血から汙過まで一貫国内生産
最終汙過は孔径0.1 μ mのメンブレンフィルター使用

準胎児血清

生後24時間以内で初乳を飲む前の新生仔牛から採血

新生仔牛血清

生後2週間以内の新生仔牛から採血

成牛血清

1.5才以上の牛から採血

ARMOUR血清

Armour Pharmaceutical Company (U.S.A.) 製造

胎児血清

(Rehatuin® F.S.)

仔牛血清

生後16週間以内の仔牛から採血

何れもロットチェック用サンプルを提供致します。



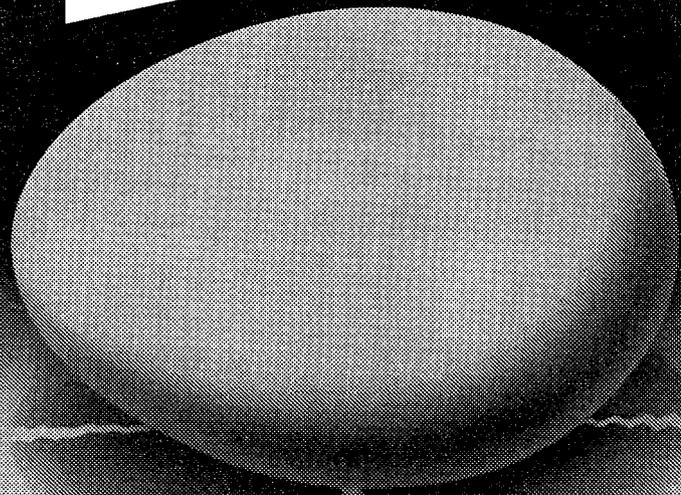
三菱化成工業株式会社 医薬事業部

〒100 東京都千代田区丸の内2-5-2(三菱ビル)
☎03(283)6791(直通)

大阪支店化成品部門 ☎06(208)4560(直通)
東京支店化成品部門 ☎03(283)6100(直通)

名古屋支店化成品部門 ☎052(562)2556(直通)
九州支店化成品部門 ☎092(291)8891

増殖 エネルギー



増殖を支える大きな力、組織培養用培地 —— 日水製薬から

■ 高圧蒸気滅菌可能 KM含有 NaHCO ₃ *L-Gln不含	イーグルMEM培地①
■ 高圧蒸気滅菌可能 KM含有 NaHCO ₃ *L-Gln*PR不含	イーグルMEM培地②
■ 高圧蒸気滅菌可能 NaHCO ₃ *L-Gln*PR*KM不含	イーグルMEM培地③
■ 高圧蒸気滅菌可能 浮遊培養用 KM含有 NaHCO ₃ *L-Gln不含	イーグルMEM培地④
■ 高圧蒸気滅菌可能 KM含有 NaHCO ₃ * L-Gln*L-Arg*L-Leu*L-Met*L-Phe不含	イーグルMEM培地⑤
■ 高圧蒸気滅菌可能 NaHCO ₃ *L-Gln不含	イーグルBME培地
	イーグルMEMアミノ酸ビタミン培地
■ NaHCO ₃ 不含	ダルベッコ変法イーグル培地①
■ 高圧蒸気滅菌可能 NaHCO ₃ *L-Gln不含	ダルベッコ変法イーグル培地②
■ NaHCO ₃ 不含	199培地
■ NaHCO ₃ 不含	ハムF12培地
■ NaHCO ₃ 不含	RPM I 1640培地①
■ 高圧蒸気滅菌可能 NaHCO ₃ *L-Gln不含	RPM I 1640培地②

■ NaHCO ₃ 不含	フィッシャーの培地
■ 高圧蒸気滅菌可能 KM含有 NaHCO ₃ *L-Gln不含	ES培地
■ NaHCO ₃ 不含	ハンクス液①
■ NaHCO ₃ *PR不含	ハンクス液②
■ NaHCO ₃ 不含	アール液
	ダルベッコPBS(-)粉末
■ ダルベッコPBS用	金属塩類溶液
■ 無菌凍結乾燥	グルタミン



製造発売元

日水製薬株式会社

本社 〒170 東京都豊島区巢鴨2-11-1

電話 03 (918) 8166 (代)

営業所 東京・関東・大阪・名古屋・広島・福岡・仙台・札幌

SIGMA
PRICE LIST
APRIL 1977

BIOCHEMICAL AND
ORGANIC COMPOUNDS

for Research
and DIAGNOSTIC
CLINICAL REAGENTS

EASY TO
ORDER
FROM
SIGMA



Telephone COLLECT
(charges reversed)
from Anywhere in the World

TO PLACE AN ORDER
Call your operator that you want to
place a collect call "to anyone" at
314-771-5750

TO CALL OUR CUSTOMER SERVICE DEPT. **314-771-5765**

SIGMA CHEMICAL COMPANY
3050 DRURY ROAD
ST. LOUIS, MISSOURI 63103
U.S.A. TEL. NUMBER 314-771-5750
8 A.M. TO 5 P.M. (Central Standard Time)

SIGMA シグマ製品がブーンと お求めやすくなりました!

日本特殊薬品では、アメリカ・シグマ社と代理店
契約を結び、シグマ社最新カタログの全製品を、
下記の要領で簡単にお求めいただけます。

- シグマ社の製品一切は、ご使用者への直結販売にかぎります。
- 遠隔地への送品には、荷造り・送料を実費申し受けます。少量の場合には、代金引換えにてお願ひすることがあります。
- 汎用品はできるだけ常蔵していますが、品切れ、その他の場合は約1カ月のうちに取りよめます。(船便のときは約2カ月後)

お問い合わせは下記へ

(シグマ社受権代理店)
日本特殊薬品株式会社

大阪市西区京町堀1丁目8番22号(〒550) ☎06(448)2261(代表)
私書箱番号(〒530-91) 大阪中央局第755号

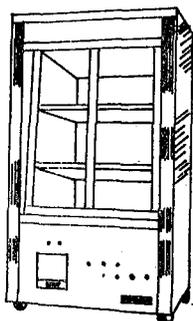
910-761-0593

SIGMA
CHEMICAL COMPANY

NK式生物研究用機器

NK式電気低温恒温器(送風循環型)

高精度普及型

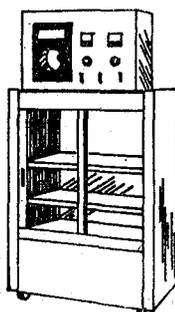


型式	LP-100 -S型	LP-150 -S型	LP-200 -S型
仕様			
内法 開口×奥行 ×高さ%	460×380 ×490	560×380 ×670	660×410 ×670
温度 範囲	+5℃ ~45℃	+5℃ ~45℃	+5℃ ~45℃
価格	26万円	30.5万円	32万円

*その他いろいろなタイプがあります。

NK式プログラム電気低温恒温器(送風循環型)

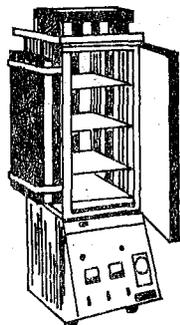
四季の温度がプログラムで自在に再現できます!



型式	LP-150 -3P	LP-200 -3P	LP-300 -3P
仕様			
内法 開口×奥行 ×高さ%	460×880 ×480	560×380 ×670	660×410 ×670
温度 範囲	+5℃ ~45℃	+5℃ ~45℃	+5℃ ~45℃
価格	49.8万円	53.5万円	60万円

NK式人工気象器

植物の育成、小動物(昆虫)飼育の本格派!

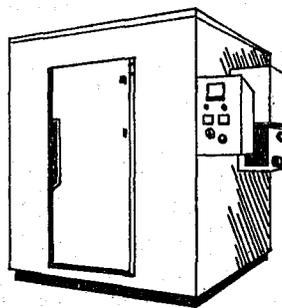


型式	LH-100 -RD型	LPH-100 -RD型	LH-100 -RDP型
仕様			
内法 開口×奥行 ×高さ%	360×350 ×680	360×350 ×680	360×350 ×680
温度 範囲	+5℃ ~45℃	+10℃ ~45℃	+5℃ ~45℃
価格	温度のみ 47万円	温・湿 度付 73万円	プログラ ム付 66万円

*その他いろいろなタイプがあります。

NK式プレハブ電気低温恒温槽

組立、移設、増設が思いのまま!

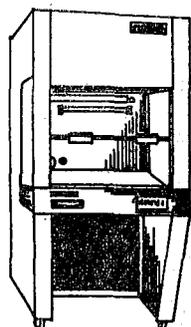


精密型

- LH型+5℃~45℃
価格1坪 1,190,000円
より各種
- LP型+18℃~45℃
価格1坪 1,290,000円
より各種

*詳細はプレハブシリー
ズカタログをご請求下
さい。

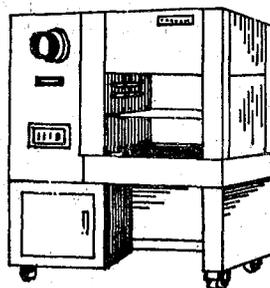
NK式クリーンベンチ(垂直層流型)



NKB-VS-850
¥780,000
NKB-VS-1300
¥880,000

NK式クリーンベンチ(垂直層流両面型)

無菌作業の能率アップに!

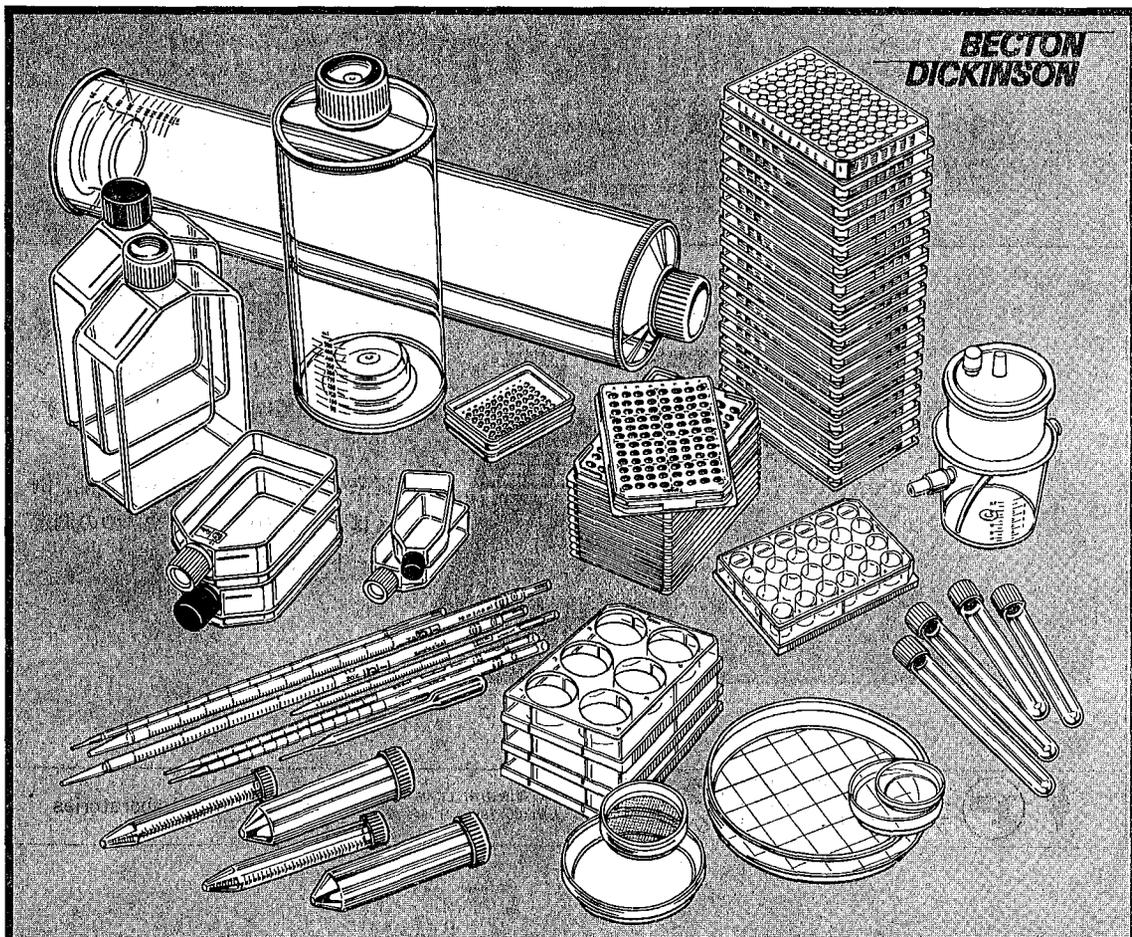


NKB-VW-850
¥1,200,000
NKB-VW-1300
¥1,500,000

NKS 株式会社 日本医化器械製作所

本社 〒550 大阪市西区江戸堀1丁目19番24号 電話 大阪 06(443)0712代
 東京営業所 〒183 東京都府中市緑町7053-4 電話 府中 0423(65)3245代
 工場 〒583 羽曳野市駒ヶ谷5番地47号 電話 羽曳野0729(58)1919代

**BECTON
DICKINSON**



1957年、組織培養器具にプラスチックの時代が始まった。 **ファルコン組織培養器具**

1956年11月、米国 Emeryville の海軍微生物研究所では、人や動物の細胞をポリスチレン製ディッシュで培養することに興味を示しました。このことにいち早く着目したファルコンでは、プラスチック表面における細胞の付着や増殖について研究を進め、1957年ついに組織培養処理を施した高品質のプラスチック製ディッシュの開発に成功致しました。

それは、ガラス製器具の使用にと

なうさまざまな問題点を一挙に解決し、組織培養の分野に大きな前進をもたらしました。

そして今日まで、ファルコンの活動は、よりすぐれた組織培養器具を開発することに集中しました。

その成果として、最近ではより高度な表面処理を施したプライマリア組織培養器具をお届けすることもできました。

組織培養の進歩とともに、ファルコンは常に新しい可能性をもとめ続けます。



Falcon

輸入販売元

Becton Dickinson Overseas Inc.

ベクトン、ディッキンソン オーバーシーズ インク

〒107 東京都港区赤坂 8-5-34 島藤ビル TEL 03(403)9991(代)

●B-D、ファルコン、Falcon、プライマリアはベクトン、ディッキンソン アンド カンパニーの商標です。●Becton Dickinson Labwareはベクトン、ディッキンソン アンド カンパニーの事業部です。

製造元

Becton Dickinson Labware

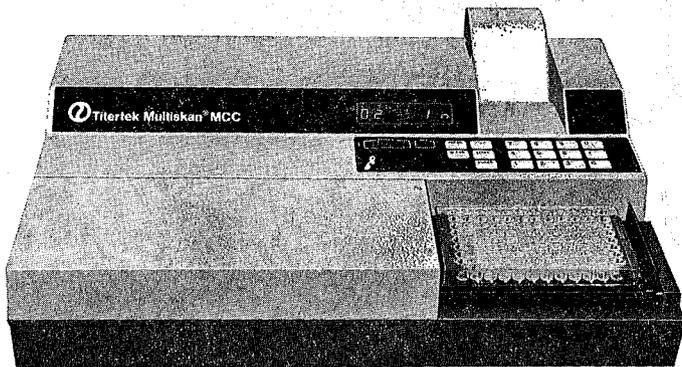
ベクトン、ディッキンソン ラブウェア事業部

Division of Becton Dickinson and Company

コンピュータ制御が可能になりました

マイクロプレート用吸光度計

タイターテック® マルチスキャンMCC



★コンピュータ制御可能です。
 接続コンピュータのキーボード、あるいはプログラムによりマルチスキャンMCCを直接制御することができます。

★従来のマルチスキャンMCの機能、例えばデータの取り込みや7つの測定モード等も継承しています。



大日本製薬株式会社
 ラボラトリー プロダクツ部

〒564 大阪府吹田市江の木町33-94
 TEL 大阪(06)386-2164(代表)



Flow Laboratories

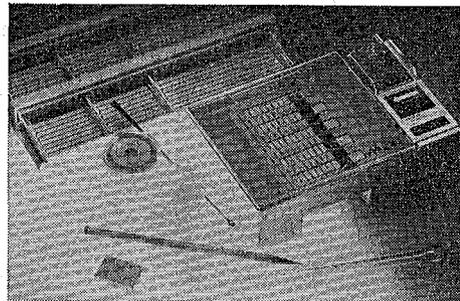
Mupid-2®

ミニゲル電気泳動システム《ミューピッド-2》

従来のミューピッドにポリアクリルアミドゲル調製用カバーが付きまして、アガロースゲル同様、簡便な使用が可能となりました。

- お一人に一台以上。
- 安全、軽量、簡単な操作。
- 学生の実習用など教材としても最適。

※部品の別売もしております。



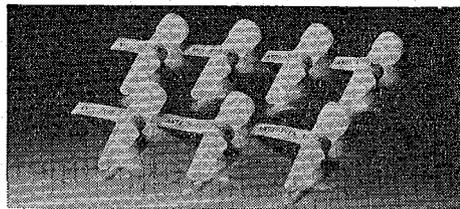
超安価 **¥29,800**

(PAGE調製用カバー、電源及びゲルメーカーセットを含む)

Didets® (抗血清)

DIAGNOSTIC DETECTION SYSTEM

- 全血清(留分)の凍結品、高力価。
- 細胞骨格研究用等にお使いください。



品名〔抗原由来〕

特異性

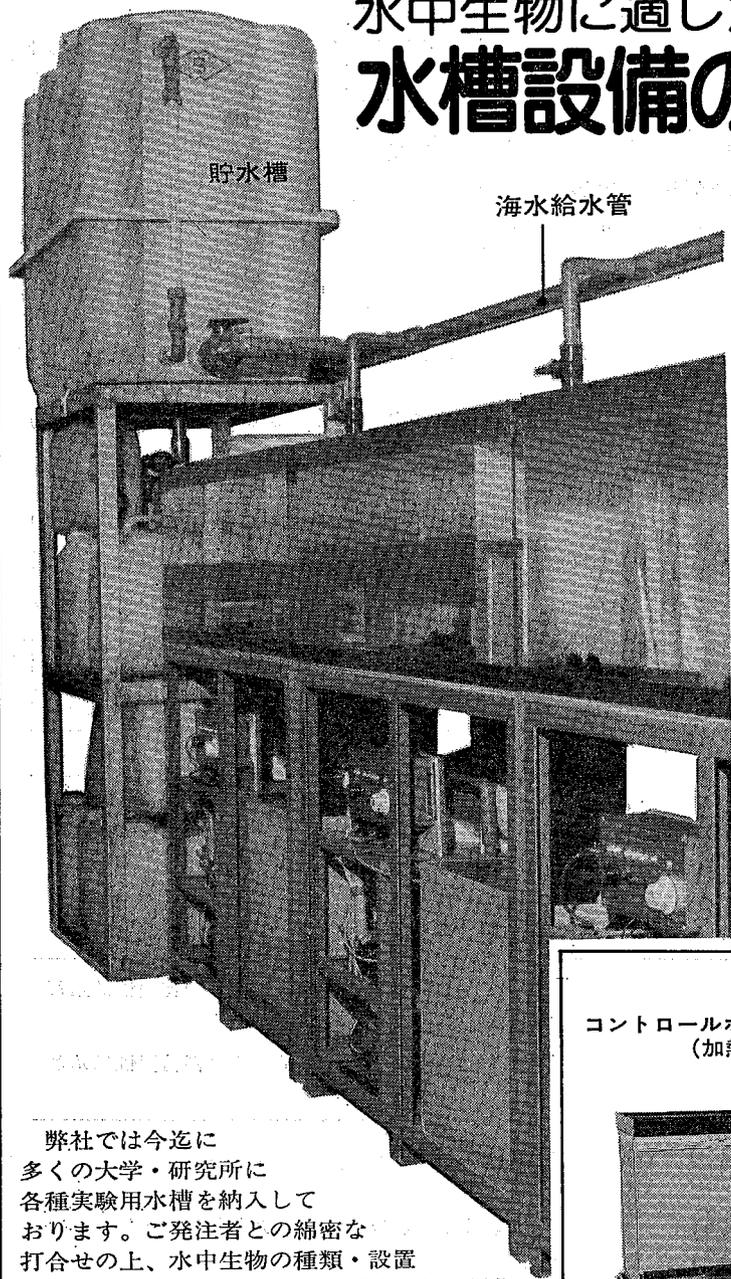
[ウサギ] 抗タイプI・コラーゲン (Anti Collagen, type I) [ウシ真皮]	ヒト及ラットと交差あり。タイプII、IVコラーゲンと交差せず、タイプIIIコラーゲンと僅かに交差(ELISA法)。
[ウサギ] 抗タイプII・コラーゲン (Anti Collagen, type II) [ウシ関節軟骨]	ヒト及ラットと交差あり。タイプI、III、IVコラーゲンと交差しない(ELISA法)。
[ウサギ] 抗アクチン (Anti Actin) [ニワトリ胸筋]	非筋細胞アクチンとも交差する。種特異性は殆どなし。
[ウサギ] 抗ミオシン (Anti Myosin) [ニワトリ胸筋]	非筋細胞ミオシンとも交差する。種特異性は殆どなし。
[ウサギ] 抗チューブリン (Anti Tubulin) [ラット脳]	ヒトと交差する。
[ウサギ] 抗S-100蛋白 (Anti S-100 Protein) [ウシ脳]	ヒト、ラット、マウス、ウナギと交差する。
[ウサギ] 抗黄体形成ホルモン-β(LH-β) (Anti Luteinizing Hormone-β)(Anti LH-β) [ヒツジ下垂体]	ヒト、ラット、マウスと交差する。

※近日、抗タイプIIIコラーゲン・抗タイプIVコラーゲン・抗タイプVコラーゲン等を新発売いたします。お問合わせは、下記までご連絡ください。

製造元  **株式会社アドバンス** 〒103 東京都中央区日本橋小舟町5-7 ☎03(667)1551(代)

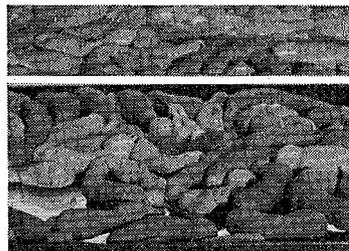
総販売元  **丸善石油バイオケミカル株式会社** 〒105 東京都港区芝浦1-1-1(東芝ビル) ☎03(798)3882(代)

水中生物に適した 水槽設備のご相談は どうぞ!!



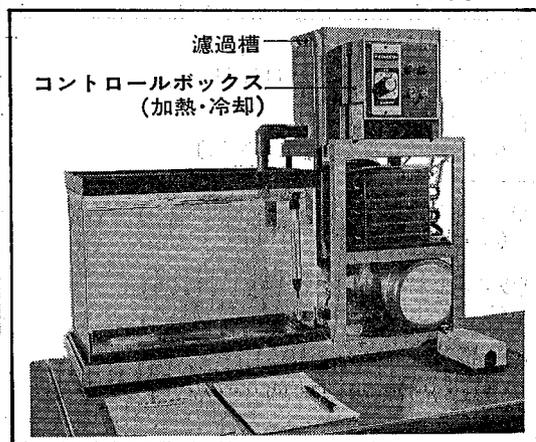
アクリリュウム水槽

- 水槽寸法：1200×450×450H(%)×3台
- 海水の給水を容易にするため貯水槽をもうけ各水槽に配管しました。
- 左側の水槽では“ゆむし”を飼育中。



卓上型実験用水槽

- 水槽寸法：450×250×350H(%)
- 外形寸法：800×300×670H(%)
- 水中生物の飼育に必要な機能(濾過循環・水温調整・空気供給等)の全てをそなえています。



弊社では今迄に
多くの大学・研究所に
各種実験用水槽を納入して
おります。ご発注者との綿密な
打合せの上、水中生物の種類・設置
条件・ご予算に合わせて基本プランから製作・
施行までの一切をお引受けいたします。
水中生物実験をご計画の際は、弊社の技術と
アイデアをご利用下さい。

大型アクリル水槽 ● FRP水槽 ● コンクリート水槽 ● 水槽用加熱・冷却ユニット ● 運搬車輛用水槽 ● 付帯工事一式

お気軽にお電話下さい。

☎東京03(778)1751(代)
Fax. 東京03(775)8842



佐藤工芸有限公司

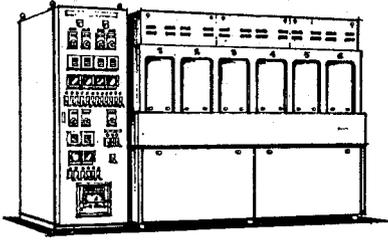
〒143 東京都大田区中央2丁目2番地6号

仙台営業所(活魚センター) 〒989-23 宮城県亶理郡亶理町荒浜鳥の海港 ☎02233(5)3230

Aquarex

研究に應える設備です

研究者のニーズにどう対応できるか——できるかぎりの努力をする
べきだと考えています。多機種の内から一部製品をご案内いたします。



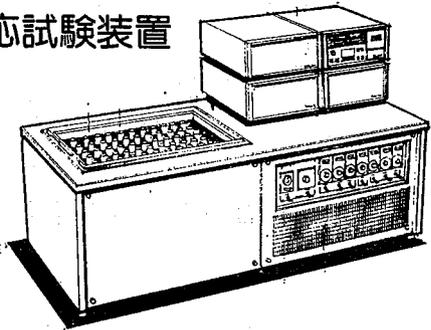
低温水棲生物生理実験装置

低温水棲生物の生理実験用装置。極寒冷地の植物性・動物性プランクトン、ウニ、ヒトデ、ベントス等に最適。水槽・温度調節装置・照明装置を装備。6槽分離独立。温度制御範囲は $-5^{\circ}\text{C} \sim +30^{\circ}\text{C}$ 。照明装置（クールレイランプ、熱線吸収ガラス使用。高照度30,000 Lux。照度・照明時間の自由設定可能。

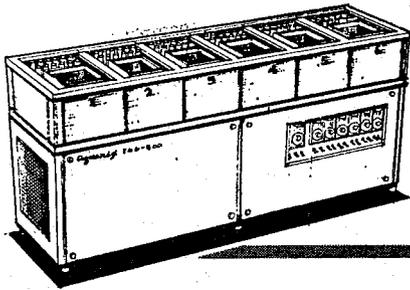
TG6-1500

卵稚子温度反応試験装置

水生生物の卵・稚子の環境温度に対する反応研究用に最適の装置。試験管88本により環境温度勾配を広範囲に一定保持。実験対象の各部位温度を時間経過に従って記録。照度も自由に選べる照明装置。小型多点温度記録装置が特長です。



TG11-8



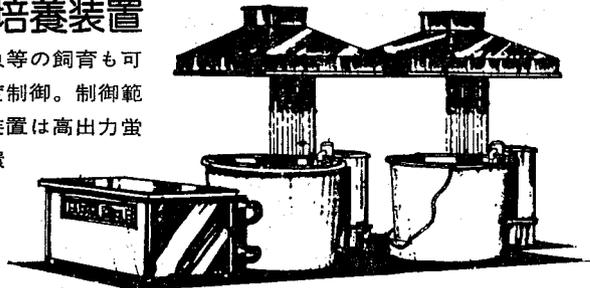
卵稚子温度反応試験装置用馴致装置

卵稚子温度反応試験装置（TG11-8）の馴致用装置。本装置は6槽に分離独立。水槽ごとに温度設定が可能。各槽ごとの試験管挿入可能。卵稚子を反応装置（TG11-8）に入れる前準備に、また分類作業に最適。温度制御は正確・広範囲に温度設定が可能。

TG6-300

プランクトン培養装置

動植物性プランクトンの海水培養用装置。幼魚・稚魚等の飼育も可能。2ポリエチレン円形2重水槽。外側槽による温度制御。制御範囲 $5 \sim 35^{\circ}\text{C}$ 。ヒーター・クーラー自動切換式。照明装置は高出力蛍光灯。光量調節・照明時間の自由変更可能。海水循環酸素補給・水質維持装置付。



AR11D-1500

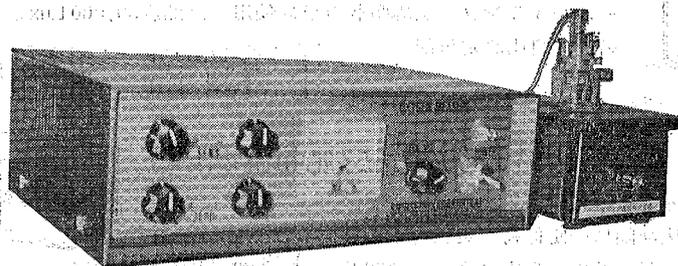
株式会社 **アクアレックス**

〒143 東京都大田区中央2丁目2番6号

お問合せ
ご相談はお気軽に ☎ 東京 03(778)0202

酸素電極による呼吸測定装置 (溶存酸素による呼吸測定装置)

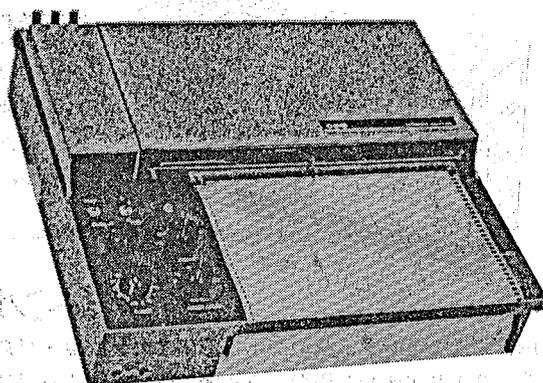
ミトコンダリア及び細胞懸濁液の溶存酸素減少による呼吸率の測定は、古くから行なわれて来ました。懸濁液を入れる密封容器の取扱いはかなりむずかしく、その容器の変更も困難でしたが、この容器は1.5ml~5mlまでの容量の変更が容易であり、試薬を懸濁液に投入したり、懸濁液の一部を密封状態のまま取り出す事が出来ます。セルはウォータージャケットがついていますので精密な温度コントロールが出来ます。フルスケール10mVの記録計に接続しても御使用できます。



S-I 溶存酸素測定装置

記録計

1mV~10V
フルスケール全幅移動可能
400K Ω ~無限大(レンジによる)
250mm幅
6段変速(標準最少2.5mm/min)
AC100V 50~60Hz



信誠理化学器械株式会社

〒112 東京都文京区後楽2-21-14

TEL (03) 815-3066代

FAX (03) 815-3231



イオン交換水・蒸留水の 大量採取に!

オートスチル WG-55/75型

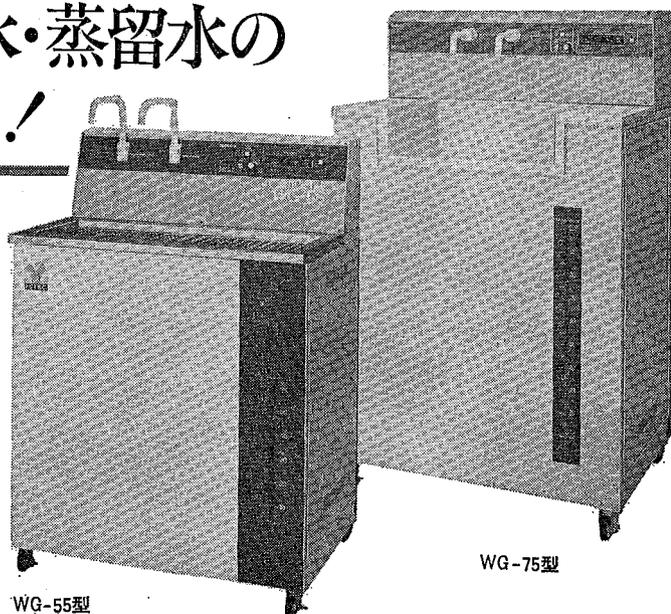
マイクロコンピュータ制御機構を採用、純水製造工程の水質チェックができるデジタル水質計をはじめ、独自の採水機構、ボイラ水自動排水機構などを備え、蒸留水はもとより、調合、洗浄に必要なイオン交換水を直接に、しかも大量に採取できるニュータイプです。

蒸留水採取量 (最大流出量)

WG-55型: 約5 ℓ/h (2.5 ℓ/min)

WG-75型: 約10 ℓ/h (3.0 ℓ/min)

イオン交換水流出量
約1.5~3.5 ℓ/min



WG-55型

WG-75型

ヤマト科学株式会社

本社 〒103 東京都中央区日本橋本町2-9-5 TEL. (03) 279-0911 (大代表)
新橋別館 〒105 東京都港区浜松町1-1-11 TEL. (03) 434-7811 (大代表)

■営業所/大阪・京都・名古屋・福岡・熊本・広島・仙台・札幌・金沢・甲府・城北・川崎・横浜・平塚・厚木・八王子・国分寺・千葉・大宮・川越・熊谷・宇都宮・筑波・水戸・鹿島

Silver Stain KANTO

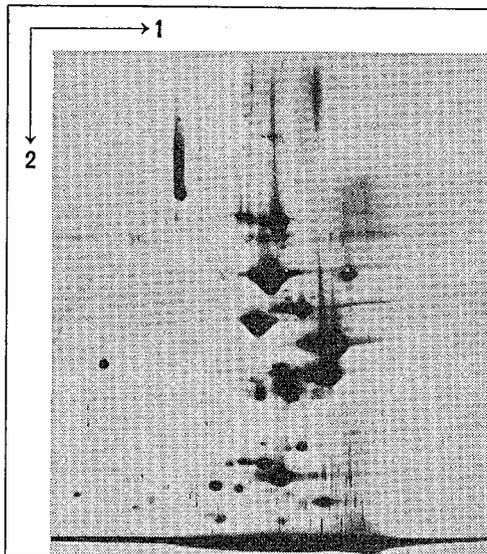
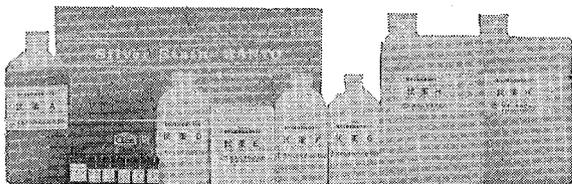
電気泳動用銀染色キット

シルバーステインKANTOは、蛋白・核酸を高感度で簡単に検出できます。

シルバーステインKANTOは、現像が緩やかにすすむように調整されています。現像停止のポイントを判断しやすく美しい染色像が得られます。

Cat.No.57650 **Silver Stain KANTO**

電気泳動用銀染色キット・シルバーステインKANTO
スラブゲル (140mm×140mm×1.0mm) 25枚分



O'Farrell 2D-electrophoresis (一次元目はNEPHGE(1)、二次元目は、SDS/PAGE(2))。試料は、筋蛋白5 μg。

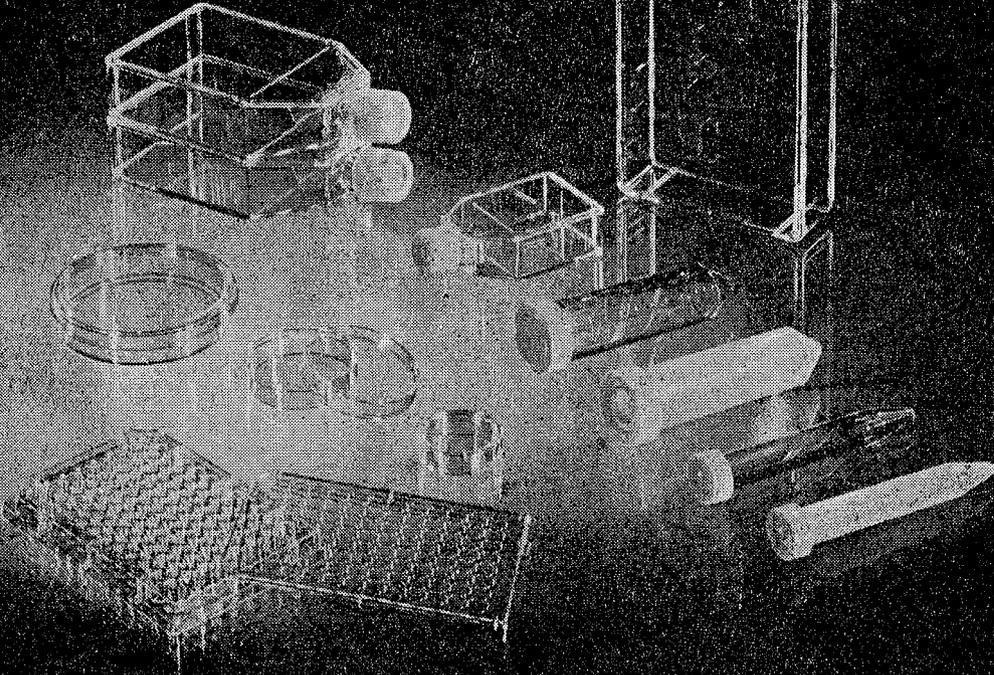
関東化学株式会社 試薬事業本部

103 東京都中央区日本橋本町3-7 03(663)7631
541 大阪市東区瓦町3丁目1番地 06(222)2796

CORNING

組織培養用プラスチック製品

ご満足いただけないCORNING組織培養用プラスチック製品は、無償でお取替えることをお約束します。



PYREX®のコーニングが提供する組織培養用プラスチック製品は
実験のバラツキを解消します。

●無菌生産

コーニングの組織培養用製品は、無菌環境で作られています。このためバクテリアは勿論、機械油の蒸気やほこり等の付着もなく、培養特性が安定しています。

●フォームラック

コーニングの遠沈管・培養管には、フォームラック付きがあります。収納や運搬に便利なおうえ、ガタツキがないため傷をつけることがなく、沈澱物が再浮遊する心配もありません。

●100%リークテスト

コーニングのフラスコは、全数圧力試験を行っております。また厚手に成形されていますので、リークやクラックの心配はありません。

●ダブルシールキャップ

ダブルシールキャップは、容器の口部内側と端部の2箇所ですりしるもので、漏洩を完全に防ぎます。

●クロスコンタミネーション防止

マイクロプレートは、孔が独立しており、クロスコンタミネーションの危険がありません。

CODE	品名	品種	個/パック	個/ケース	材質(本体)	表面処理	滅菌	備考
25000	ペトリ皿	35φ×10mm	20	500	スチロール樹脂	○	無菌生産	
25010		60φ×15mm	20	500	"	○	"	
25020		100φ×20mm	20	500	"	○	"	
25100	フラスコ	25cm ³ (70m ³)	20	300	スチロール樹脂	○	無菌生産	カントネック、ダブルシールキャップ
25110		75cm ³ (270m ³)	5	100	"	○	"	"
25120		150cm ³ (600m ³)	5	40	"	○	"	"
25140	ローラー ボトル	850cm ³ (2350m ³)	2	36	スチロール樹脂	○	γ線	ダブルシールキャップ
25200	培養管	16φ×125ラック付	50	500	スチロール樹脂	○	無菌生産	ダブルシールキャップ
25310	遠沈管	15m ³ ラック付き	50	500	スチロール樹脂	-	γ線	許容遠心力1800 G、ダブルシールキャップ
25330		50m ³ ラック付き	25	300	ポリプロピレン	-	E T O	" 5000 G "
25820	マイクロ プレート	24孔、平底、蓋付き	1	50	スチロール樹脂	○	γ線	
25860		96孔、平底、蓋付き	1	50	"	○	"	

●表面処理は、親水性と細胞親和性を与えるもので、コーティングではありません。
●ETOは、エチレンオキシサイドガス滅菌です。
●詳細はカタログをご請求ください。

岩城硝子株式会社

本社 / 〒100 東京都千代田区丸の内3-2-3 (富士ビル)

本販売部 ☎ 03(214)7401(代)

大阪支店 ☎ 06(362)6291(代)

名古屋支店 ☎ 052(211)3855(代)

九州支店 ☎ 092(451)5606(代)

広島支店 ☎ 082(248)0293(代)

札幌営業所 ☎ 011(221)3477(代)